
獣の国の花嫁

山上翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獣の国の花嫁

【Nコード】

N1565J

【作者名】

山上翠

【あらすじ】

水の国の王女オーエンは、ダンスより剣術を好む、一風変わった姫君。政略結婚により砂漠の国に嫁ぐことが決まっていたが…

1. 1 (前書き)

二作品目です。こちらも気長に更新していく予定です。よろしくお
願いします。

「オーエン！」

こっちへ駆けて来る、小柄な影。

「…リーニヤ。どうしたの？」

「どうしたの？ じゃないわよ！ あんたこんなところで何やってんの！？」

「え…何って…」

自分の手の中の短剣を見つめる。

「剣術の練習してた」

「——もう！ そんなことやってる場合じゃないでしょー！」
リーニヤがすごい剣幕で言った。

私の幼友達は、まるで遠慮というものを知らない。

「今日は仕立て屋が来る日なんだってば！ あんたのドレス作るのにあんたいなくてどうすんのよ！」

…そうだった。

「そう言えば、そうだったね」

「勘弁してよね。そうやって剣術なんて男らしいことしてると、婚約者に嫌われるわよ」

…別に嫌われたって構わない。

結婚なんてしたくないもの。

まして、一度も会ったことのない男となんて。

…顔に、出ていたんだろう。

「あんたがこんなの気に入らないのはわかるわよ。でもあんたは王女だもの。人には身分に応じた生き方があるわ」

幼い頃からずっと、言われ続けてきた言葉。

わかってる。

でも、私が欲しいのは、そんな言葉じゃない。

「行く。セシル、付き合ってくれてありがとう」

背後の青年に言う。

我が国随一の腕を持つ剣士は、ふわりと含みのある笑みを浮かべて言った。

「いえ。ではまた後ほど、姫様」

後ほど、ね。大丈夫だろうか。

「うん」

無駄のない、優雅な物腰。穏やかで深い眼差し。時折浮かべる柔らかな微笑。

私はこの人が、眩しい。

彼…セシルは流れ者たちと共に二年前突然現れて、我が国の精鋭をいとも簡単に負かしてしまった。

それから彼は、お父様の頼みによって王直属軍の隊長となり…

その美しい太刀筋を見た私は、居てもたってもいられなくて

彼に剣の指導を頼んだ。

リーニヤは、彼が好きだ。

「リーニヤ」

「何？」

彼の前では、リーニヤは殊の外ぶっきらぼうになる。

「私は行くけど、セシルに何か冷たいものを用意してあげてくれる？暑い中付き合わせてしまったし」

「…わかった」

微かにリーニヤの顔が紅く染まる。

「よろしくね」

「はいはい。さっさと中入りなさいよ。もう王様も王妃様もお待ちかねなんだから」

お待ちかね、ね。まあたぶん王妃様は大喜びだろうけれど。

「失礼いたします」

「おお、来たかオーエン」

「はい、お父様」

「何だ、また剣など振り回していたのか。そろそろ遊びはやめておきなさい」

：

お父様は何にも、知らないくせに。

「…わかっています。結婚したら、剣術は一切やめて夫の気に入るよう努めます」

「当然ですわ。あなたのお相手は我が国の同盟国、砂漠の国の王子殿なんですから。しっかりしていただかないと」

さも心配そうな作り声で、義母は言う。

「はい、お義母様」

わかっている。

どうして“私が”砂漠の国へ嫁がされるのか。

同盟だけが目的じゃない。それもあるけれど。

私を遣れば、他の姉妹たちが…つまり義母の本当の娘たちが、砂漠の中にある貧しい国に嫁がなくて済むから。

そして、義母にとって目障りな存在の私を、厄介払いできるから。

“国家の利益”なんてただの建前。政略結婚を動かすのはただ一部の人間の勝手な思惑ばかり。

そういうものだ。

割り切らなければ、やっていられない。

「とてもお似合いですわ、オーエン様」

王宮お抱え仕立て屋のアンナが言った。

試しにと着せられたのは何の飾りもないシンプルな白のドレス。

「オーエン様は美しいから、すっきりとしたシルエットのシンプ

ルなものがよろしいですね。お任せ下さい、最高のものに仕上げてみせますから」

「任せるわ。ありがとう、アンナ」

「お礼なんて要りません。私はオーエン様のために働きたくて王宮お抱えになったんですもの。本当はオーエン様には、もつと素敵な方との結婚が相応しいのに……私は悔しくて」

「ありがとう、そう言ってくれるのは嬉しいわ。でも私には砂漠の国の王子との結婚さえ分不相応なくらいよ。向こうが私を気に入ってくださるといいんだけど」

「気に入らないなんてそんなこと、ありえません」

私が何の不満も抱かないのが齒がゆいのだろう。アンナはぷいと横を向いて言った。

「そう願うわ」

一通りの採寸が済むと、アンナは帰って行った。疲れる。

この国での毎日は、疲れる。

ドレスの他にも小物やら何やらのことで散々引き回された後、結局自分の部屋に帰れたのは日の沈む頃だった。

「お帰りなさいませ」

ずらりと並んだ召し使いたちに交じり、目立つ者が一人。

「あら。セシル、来てたの？」

「ええ。姫様の護衛担当の者が今朝ケガをしましたので、今夜は私が代わりをいたします」
なるほど。

大丈夫なわけだ。

「そう……よろしくね」

「はい、姫様」

今日の夜は、晴れるだろうか？

ギシッギシッ

「あッ…やぁ…アッアッ！」

「姫様はいけない方だ…こんなに濡らして」

「やぁッ！」

敏感なところを責められる。

「一月後には輿入れされるというのに、そうやって私を煽って…」
ギシッ

「あッ…だめっ」

セシルは私の身体のすべてを知り尽くしてる。

どこをどうすれば私を感じるか。

「セ…シルッ！」

どうすれば私から欲しい言葉を引き出せるか。

「今日はずいぶん性急ですね。さぁ姫様、言って下さい、いつもの言葉」

全部。

こうなるともう何も、考えられない。

セシルのこと以外は。

「好き…セシル、好き…！」

身分も体面も羞恥心も、全部忘れて。

ただ与えられる愛しい人を、貪る。

「好きッ…」

「私も愛しています、姫様…」

いつも返される、甘い言葉。

セシルのその言葉が、私をまた熱くする…

それから次第に余裕がなくなったようにして、セシルはさらに激しく私を責め立てていく…。

私はそのときの、余裕のないセシルの顔が、いちばん好き――

ギシッ——！

一際大きな音で、ベッドが軋む——

目覚めるともう、夜明けだった。

「おはようございます、姫様」

すぐ横から、セシルの声がする。

「おはよう」

幸せ——

彼と共にいるとき、私は幸せ。

「身体は、大丈夫ですか？」

「大丈夫。最近は身体が慣れてきたから」

「……」

「喜ばしいことでしょうか？それよりセシル、あなたもう行かないと

……早朝訓練の時間なんじゃない？」

「……そうですね。では、訓練後に、また」

「はい、師匠」

くすりと笑って、セシルは起き上がり、私に優しくキスをした。

これからまた一日、私たちは剣術の師匠と弟子。そして主人と家来。

それが悲しくないと言ったら嘘になる。

でも、彼と少しでも一緒にいられるから、今はまだ幸せ。

——あと一月で、それもかなわなくなるから。

「姫様、お待たせいたしました。遅れて申し訳ありません」

セシルは早朝訓練の後すぐに、私に稽古つけに来てくれる。

疲れてるはずなのに……

彼は決してそんな様子を見せない。

「では、始めましょう」

あくまでも静かで、穏やかで。

——それが、強者に必要な資質。

この一年の間に嫌というほど感じたこと。

「お願いします」

私は、短剣をかまえた。

心を無にして。

迷いを捨て、

執着を捨て、

ただ目の前の相手のみに集中する。

技術など二の次。

その強い精神力が、勝敗を分ける。

生と死を分ける。

カラ……ン

私の手から、短剣が落ちた。

「私の勝ちです」

私の首もとに突き付けた剣を下ろし、セシルは言った。

「やっぱり、敵わないわね」

「今姫様に勝てないようでは国一の剣士として立つ瀬がありませんよ」

「それはそうだけど」

わかってるけど。

でも悔しいことに変わりはない。

「ご心配なさらなくても、今の姫様に勝てる者などそういませんよ」

「うん……」

「姫様には才能がある。きっとすぐに私とも互角に戦えるようになるってしまいますね」

セシルは微笑む。

「ありがと」

できることなら。

今のまま、セシルと戦えるようになるまで、この国にいらればいいのに。

「姫様」

突然、セシルがゆっくりと膝を折った。

「…どうしたの？」

「私は今朝、陛下にお暇をいただいて参りました」

——セシルの言葉が、飲み込めなかった。

「どうということ？」

「今日限りで私は王直属軍を辞めて、水の国を出ます」

国を…出る？

「どうして？」

声が、震える。

嫌。

そんなの、嫌…！

「私はもともと流れ者ですよ、姫様。私が二年もの間この国にいたのは、あなたのそばにいたかったためです。

でも、あなたは王女、一ヶ月後には結婚され、砂漠の国に行かれます。そうなればもう、私にはここに理由はありません。だから、お暇いたします」

「こんなに、早く？」

「ええ。もう、辛いですよ…これ以上、いずれ他の男のものになってしまうあなたを、そばで見ているのは」

セシルは言った。

悲しげに、寂しげに、微笑みながら。

「…どうしても、行くのね？」

泣きそうだった。

本当は…

私も一緒に行く、と。

私も一緒に連れて行って、と。

言いたかった。

でも、私にはそれはできない。

私の結婚には、国の運命がかかっているから。

「はい、姫様」

「…わかりました」

仕方のないこと。

わかってる。

「今まで、ありがとう、セシル」
だから。

涙は、見せられない。

泣いてもどうにもならないのだから。

引き止めることすらできないなら。

最後まで王女と臣下のままで。

「最後に、お願いがございます」

「お願い…？」

「はい。耳を貸していただいてもよろしいでしょうか？」

「え？」

私は言われた通り、セシルの口元に耳を近づける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1565j/>

獣の国の花嫁

2011年2月3日13時40分発行